

Lafcadio Hearn の Byron 観について (2)

楠 本 哲 夫

Byron ... Byr ... Byr ... のこえが 英国全土に、そして ヨーロッパの、
いや、アメリカに、いや、世界の津々浦々に響き渡ったのは……

全世界が挙って Byron に盡きせぬ讃辞と溜息をおくり 憧憬し、あの 豪華
絢爛たる19世紀 Byron 時代の出現を見たのは……

詩人 Byron の世を惹きつけた魅力の よってきたる源泉は 果して 那边に
あったのだろうか。

L. Hearn は 這般の事情を 鋭く追求し分析する。

“Mathew Arnold said it was
‘immense sincerity and force.’

Arnold は Byron の名声を評して、その據つてきたる源泉は Byron 詩に
見る盡きせぬ 真摯なる情熱の吐露であり、その力強さ であると 言った。

Byron 詩には、たしかに、激情の真摯な流露と迫力があった。 しかし——

私に言わせれば Arnold は まちがっていた。

Arnold が 評したことは immense sincerity and force⁴⁾ でもって、
Byron 詩の世に与えた影響力を説明することはできないと 私は思う。”

Note (4) Byron の 親友 Percy Bysshe Shelley (1792-1822) もまた、Byron 詩の生命は Power ‘その力強さ’ であるとして Byron を英国詩人中、最大の天才であると 最も高く評価している。

“先づ、ここで、かんたんに、Byron 詩に登場する人物と 詩題材を観察して、これが、私達に何を語りかけようとしているのかを、探ってみよう。

Child Harold の場合——

その大成功の一因は、先づ、その詩題材のゆえであった と理解し得よう。

その当時、旅行は、困難であり、かつ、かなり出費をも要する行事だったのである。そのため 英国の大衆は 南方諸国、スペイン、ポルトガル、ギリシャ、トルコ の事情については その知識は ほとんど皆無であった。イタリー 及び フランスの事情については多少精通していたが 英国の作家たちは イタリーについては 多くを書いてはいなかった。そのため 若き詩人 Byron の Child Harold の作品が 絶体的新奇さの魅力ゆえに、さらに加えて、その、ある箇所に湛える憂愁の美より迫りくる感動ゆえに 大成功を博したのである。もし同種の作品が半世紀後に世に出たとすれば⁵⁾ それはなんら大衆に訴える魅力は少しもなかったであろう。”

Note (5) Napoleon 戦争時代の真只中において Byron の Grand Tour が敢行され、Child Harold が その旅の印象記であったからこそ、いくたびか生命を絶たれようとした危機のさ中に、暴風雨、雷鳴のさ中に凜然として従容、せまらず筆をとられた、この印象記が、その瞬間の感動の貴重な記録の記念として描かれたからこそ、その恐るべき迫力のゆえに 感動をつたえるのであり、それは万人の認める ところである。Hearn の、‘もし半世紀後に云云’ の評言をもって その真価が、コロンブスの卵式に、開拓者の発見が淡々と片づけられ抹殺されること しかも、それが Paradoxically に 評言されたことにはいささか承服しがたい憾み^{うらみ}がのこってならない。開拓者精神とは 後続者のために みづからを犠牲に捧げるがゆえにこそ その功績 栄光は永遠に不滅なのである。その点 Hearn の評言は あまりに

も 淡々としてかたづけられたのは舌たらずであるように思はれる。さらに Hearn のふくみに、ある種の irony の感なきをえない。

“次に Byron が 矢継ぎばやに世に問うた作品、The Giaour, Lara, The Corsair の場合——

これらもまた、その題材の新奇さゆえに、そしてその力強さ、迫力のゆえに大衆の心をうち 魅了したのである。

しかし これら一連の作品が 読者大衆の心をとらえたのは 上述の理由のみに由来したのであろうか”

Hearn は さらに問題を提起する。

“事実は——

これらの作品の中で、新しいタイプの Character が 次々と Byron によって英詩の世界に登場し 紹介されていったのである。そしてそれは The Satan of Milton を除いて それ以来の、未だ英詩の世界に類を見ない Character の矢継ぎ早やの登場であった。

これら一連の作品の中には 叛逆精神が貫かれ 横溢していた。

神と人間への叛逆、神と人間の^{おきて}掟への叛逆、そしてそれが、すばらしい誇りと 抗し難い偉力をもつて われわれの心に訴え、迫ってきた。実に その迫力は Satan 魔王 さながら であった。しかし——それは 悪魔ならぬ 人の子の所業であり、超能力ではなく、神業ではなかったのである。

読者大衆は これら、つぎつぎと 妖しく不気味に登場する 反逆者、海賊、向う見ずの冒険者たちの中に、即ち、Byron 自身の性格を垣間見たのである。

それが Byron 自身である と想像したのである。だから、Byron 自身の人間像への共鳴と好奇心が、大衆の心をかきたてたのである。

Byron の以前の作品では その登場する主人公は全く異ったタイプの人物であつた。悪魔的人間が創作の世界で登場したことはなかつた。——それは歴然たる悪魔ではなく、一人の崇高な、憂愁な人物であり、神秘的であり、美的という二重性の魅力をつねに具備していた。

次に（第三に）Byron が世に問う戯曲、劇詩の場合——

‘Mantred’ そして ‘Cain’ の中では、月並みな、世間的考 idea は、世の掟、そして 宗教への叛逆、力と誇への栄光により、異様に、——妖しく、妙なる、Byron の不思議な 筆によって——すっかり くつがえされている。

作品中 登場する人物は 同じタイプではあつたが、その纏^{まと}った衣裳は、アクセサリーは つねに異っていて 斬新^{ざんしん}な感覚を十二分にあたえた。

‘Mazeppa’ や ‘The Siege of Corinth’ の如き作品は、ひとしく、英文学の倫理的伝統に叛逆している。つまりこの作品の中で Byron は

- ① 罪が正当化されうる場合を暗示し
- ② 信仰と祖国を否定した人間への共鳴感を描いている。

‘Beppo’ や ‘Don Juan’ の場合——

その成功は 主として それらの描き出した

- ① scandal 醜聞のにおい、の妙味であり、
- ② 非道徳のもつ新しき意識表現
- ③ 社会の因襲への耶喩、嘲笑

のゆえであり そして とくに Don Juan の場合は 凡ての文明社会の愚行の数々への諷刺が 淡々として ユーモアな筆致で描かれたことが こよなく 読者大衆によろこばれたためである。

これらの作品は 大衆のすべてに 大変な衝撃を与えたが 同時に 非常な絶讃をもって迎えられた。それは おそらく Byron が予期し望んだすべての共鳴的反響であっただろう。

Byron は 今や 時代の寵児であり 最も偉大な英雄として 迎えられた。Byron の肖像は 全ヨーロッパの 幾千もの応接間、サロンに飾られ つぎつぎと うたい継いだ Byron の詩^{うた}は、メロディとなって あらゆる国のことばで 華麗に 奏でられていった。

いまや Byron は 美しい女性たちの 憧れる夢であり 春秋に富む若人の憧憬^{ふくけい}的であった。Byron の 身にまとった衣裳すら幾千もの世の人々は争って これを模倣した。Byron 的 ファッションが 世の流行となった。床屋は Byron の髪型に できるだけ似せて刈った。Byron の一挙手一投足が 模倣^{まね}られ、Byron 的冷笑が 教養ある 洗練された 品位ある証^{あかし} であると考えられた。

上流社会も 教会も Byron について 自分たちの 胸につかえた意中を 腹^{ふくぞう}臆なく 申し立てることもできたであろうし さらに Byron 追放のことを 宣言することさえ したかったであろう。

だがしかし 大衆は彼を愛し 偶像化し熱狂的崇拜者として 彼を迎えた。

このことは 実に不可思議な現象であった。 何故ならば———この熱狂を醸し出した Byron 作品のすべては Byron 作品を絶賛した大衆の諸の慣習の規準にしたがうならば、 あらゆる点で 不道德であるはずだったから。outlaw 無法者の詩^{うた}であったから。 いや だからこそ、パラドキシカルに 大衆の心を惹きつけたのであろう。

Byron の詩風は シニカル であり、さもなくば エロティックなものであり、さもなくば、英国民衆の最も尊敬するすべてのものに 叛逆的であったから。”

この珍現象をわれわれは どう説明すればよいのだろうか。 Hearn は さらに 問題を提起する。

“ここに 二三のことを例証することによって 説明するのが最も賢明であろう。

それを、たとえ、どう否定しようとも、——凡ての文明社会によって信じられている二つの全く異質の道德律が厳然として実在するということである。

その一つの道德律は、 言語によって説かれ、戒律によって教えこまれた宗教的徳性である。

いま一つは 全く これを異質なものである。

一例として 盗み という行為の 二つの場合をとりあげてみよう。

かつては君が尊敬していたある男が君の不在中に君の部屋にしのびこんで 1ドルの金を盗んだ としよう。

このことが露見した場合——

盗みを働いたこの男は たとえ 刑を免れたとしても 世間の批難は 逃れ得ないだろう。 何人も 彼の所業を知ったからには、彼を信ずること、彼を備うことは 決して、しないだろう。 この男は 無法者として、善良な社会からは 追放され 抹殺されるであろう。

しかし ここに 総額 5億ドルの盗みを働くことができる男の場合——

を考えてみよう。

大がかりな窃盗を敢てやってのける大悪党には さらに その金を手放さないで保有しておく肝智も備わっている。この男には、その才覚にもたけている。何故ならば この男は法よりも より強い力 をもつからである。

さて、純粋な道德律 宗教的戒律にしたがえば この、後者の盗みは、1 ドルの盗みを働いた前者にくらべ5 億倍も罪は重い わけですね。

しかし、あなたは——はっきりと 言えますか？

5 億ドル盗んだ男のほうを より けいべつする と。

いいえ、そう言いきれないでしょう。世間も その男のほうを より けいべつしますか？ いいえ けいべつしないでしょう。むしろ その男の才覚の稀有であることのゆえに 羨望、畏敬の念を覚えるでしょう。さらに ある種の名誉？ を 彼に与えるでしょう。

その男は、彼の娘をプリンスと結婚させるでしょう。彼の息子を貴族と結婚させるでしょう。

しかし——

道德的に言えば 重労働を強いられて投獄される並みの盗っ人よりも 後者のほうが 5 億倍も より罪深いのではないのでしょうか。そうですよ、そうです。だが、もっと さらに考えられなければならぬことがあるのです。

ここで もう一つの、別の道德律が考えられなければならないのです。それは——

われわれが、両親から、宗教の先生から 教わったものとは別の種類の 道德律、^{おきて}掟 なのです。それは是非善惡の 人間の、人の道の観念と一致するものではないのです。

それは—— 宇宙の、 冷い、 非情の、 鉄の如き、 哲理であり、 掟、 であり、
すべての宗教よりも もっと古い、そして もっと 強力的なものなのです。

私はそれを、 ‘a moral law’ と 呼びましょう。 というのは それは、 そ
れが ある種の 自己犠牲を要する という程度において moral 道徳的 であ
る からなのです。 多分 われわれは それを the law of nature 自然の律
と呼んでも いいのでしょう。 19世紀の哲学はこれを the law of evolution
進化の律 と呼んだ。 しかし われわれが それをどう呼ぼうと それは実
に 端的に次のことを意味する。

‘強くあれ、 さもなくば、 ^{わし}俺は 汝を 抹殺しようぞ’ と。

宗教の律は われわれに教える。

‘善良であれ。誠実であれ。 万人に愛を捧げよ。親切であれ。 そうすれ
ば 汝は 神を信じ 死後 幸の国に たどりつけようぞ。 たとえ 汝が賢
明でなくとも 強くなくとも。そのことを意に介すること勿れ。善こそ力であ
り 徳こそ 賢明さである。方法を知るのみでなく 汝の義務を果せ。 それ
が汝にとって 生くべく必要なすべてなのである。’ と。

しかし 宇宙の律は ^{おきて}説く。

‘^{わし}俺は 善とか美德とかには 全く関知せぬのじゃ。善とか徳なるものは
弱きこと、 ^{ほうだ}怯懦の別名にすぎぬ。 強きことのみが、 唯一、 重要なのじゃ。
^{わし}俺の掟は ^{おきて}戦 ^{たたかい}の律のみ。その褒賞は 最も強き者のみに与えられるのじゃ。

精神の最も遅しく 肉体の最も遅しきものにのみ 与えられるのじゃ。一つ
の牡蛎は、一匹の虫は いかにも善良じゃ。だが そのような弱きものは す
べて、^たわしの讃える強者の餌食としのみ存在するのじゃ。 汝らは わしの意
志を行うのじゃ。さもなくば この地上から 消えてゆくのじゃ。’ ”

さて ここで Hearn は Byron 詩の、そして、人間 Byron の、真隨に迫ってゆく。

“さて、實際問題として 人生は、現実^{じんじつ}は、闘争である。戦は道徳的行為ではない。しかし われわれは 戦はねばならぬ。戦いは、ときに栄光と名声をもたらす。しかし 誰一人として 戦いは道徳的行為である と呼ぼうとはしない。人間界の道徳律の体系にしたがうならば——— おのが、同胞の肉体を殺戮^{ころく}することを、同胞の鮮血と脳髓^{しんく}をもって大地を真紅に染めることを 決して 正義の道 とは呼び得ないであろう。さはさりながら、——— ときに戦はねばならぬ。これが 宗教的戒律と大宇宙の律との間の矛盾^{もんだい}の、歴然たる一つの証^{あかし}なのである。

宗教は善こそ、この世における重要なすべてであると教へ 宇宙は 力こそ 最も重要なものである。 と説く。

そして人間は そのどちらにも服さねばならないのである。

Hearn は この点をさらに強調して、説き続ける。

“さらに また これがすべてではない。 現在の不完全な人間社会において 宇宙^{おそ}の律は道徳の律に優先し、 道徳律は宇宙の律に服さねばならぬ。たとえ、それは 正しくないと知りつつも。単なる善^{よき}には 人生における最も善きものを保証する力はないのである。人は善良であっても まことに愚かであるかもしれぬ。 人は有徳であっても まことに弱者であるかもしれぬ。

成功者にとっては 善良であることよりも 伶俐であること、有徳であるよりも 強靱であることが要求される。もし両者を具備すれば 益々よりよいであろう。しかし—— 前述の如く——人間の性は不完全であり、善良であり、強靱である、二つを兼備しうる好運をつかむ人間は、 単に強靱ではあるが決して善良ではない人間ほど多くはないのである。この後者の場合、良心の呵責に苦しむことは より少いのである。 西欧的センスでの、ほとんどすべての実業界、商業界は、この後者の知識にのっとって行われている。実業界での道

徳（商人道德）は 単なる、相対的なものにすぎない。 人がヨーロッパにおいて 純粹なる道德の教に則^{のつと}って大規模な商取引を行おうとするならば 彼は、たちまち破産してしまうことはあまりにも歴然としている。

さて、皆さんは——

例の男が、たとへ どのような卑劣な手段によろうと 5 億ドルを手にしたとき その男の人間の評価を如何に考えるべきかについての、私の意中を よりよく 理解願えたことと思う。

世間がこれを尊敬したのは 彼が宗教の律に則^{のつと}ってではなく 大宇宙の掟に則^{のつと}って やり遂げた その所業のゆえである。 現在の財界の情勢を深慮遠望し そのような離れ技を演ずることのできる男は まづ 超人的でなければならぬ。そのような人間の頭脳は、ナポレオンの頭脳よりも もっと秀れた頭脳構造をもつにちがいないであろう。このような人間は 先づ第一に 世の中の最も法外な精神力を代表するものであり、その力を、いつの世も 輕蔑することはできないであろう。

彼はまた 彼が知的力によって獲得した 金力をも代表するのであり この力は 決して輕蔑されることは できない。

このような言葉は いかにも衝撃的に聞えるが ある人間が みづからを道德律よりも 社会の掟よりも 人の掟よりも より秀れていることを実証しうるならば 彼はヨーロッパの国々では 人生の闘い^{たたか}において、勝利者の代表であるが故に 大いなる名誉を賦与されるであろう。これは明白なこととして議論の余地はないであろう。

数年前のことだが——

英国の由緒ある貴族が——恥づべき、不将な手段によって1 億ドル以上もの財産を築いたことで、名望を得た——あるアメリカ人の金満家の娘と結婚したことで、大変な話題をまいたことがある。このことは単なる本質的に拜金的考

えのためからでなく、そのような妙技をやってのけることのできた人間が拔群の知性の持主であることを認めたからこそなのである。スケールの大きな窃盗行為は 卑しい手段によってではなく非凡な、すばらしい手段によってのみやり遂げることができるのである。

他方 1ドルを盗む者は軽蔑されてしかるべきである。何故ならば——その所業は最低の弱さを暴露する性質のものであるから。

さて——協道へそれだが 本論へと引返し Byron が 19世紀ヨーロッパ世界に及ぼした影響力について一考してみよう。もし Byron がヨーロッパ世界に、いな、全世界にその強烈な影響力を与えることができたとすれば——現に与え得たのであるが——それは 私が例証しようと試みてきた真実を Byron が——明言したのではなく——示唆することによってであった。Byron は無意識のうちに この真実を示唆したのである。Byron は 哲学者ではなかった。いや、論理的思想家ですらなかった。しかし 民衆にむかって新しいやり方で考えることを強いた。Byron は 大衆にむかって この世では只単に善良であることだけで ほんとうに 充分であるのか。我々が 悪であり まちがっている とよびなれてきたものが 存在の唯一の理由をもつのみならず それ独得の、ある種の悪魔的美をもつものではないだろうか と大衆にむかって自問自答させた。Byron は ヨーロッパの文学者に新風を吹き送った。それは 適当な呼称を欠くがゆえに Satanic spirit 悪魔的精神とよんでおこう。そして この悪魔的精神こそ 実に、純粹の道德律とは全く別個の掟——それは 苦悩の掟、闘争の掟、であり、たとへ悪の側に 残虐の側にくみしても 力の光輝を放って——の实在することへの 漠然とした認識を意味したのである。

銘記してほしいことは——Byron はこれを意図的にやったのではなかった。Byron は最初からこれを意図したほど 伶俐でなく 器用ではなかった。無意識のうちに これをやってのけた。このことが Byron が文学を制した、つかのまの、あの瞬発力をあますところなく説明している。

八方破れの 邪惡な人間どもへの Byron の讚美ゆえに 大衆はその人間たちを通じて Byron すら 観ることができなかったものを 垣間見ることができたのである。

つまり そのような人物像こそ 本質的にその影響力から何人も免れえない、人の世を生きる掟 の示標である、ということ。

やがて 時を経て Byron 精神を超えるより偉大な人々によって Byron 精神が より大きく より健全なやり方で示唆されたのである。

かくて Byron の光は 消えた。

Hearn は そう結んでいる。

しかし——私は 思う

果して 後世の詩人たちが、あの強烈な Byronic passion, そして Byronic power に迫れるだろうか？ バイロンの熱血は、 バイロンの力は 不滅である。

いつの世も 天才、英雄は 時代の所産であり 新しき時代の創造者である。時代の先駆者、開拓者に贈られる栄光は 不滅である。19世紀英国の貴族社会に叛逆し 悪魔的精神を貫いたバイロンの不敵の魂は 今の世も 燦然たる光輝を放っている。そして天界にあって 冥き人の世を照し 導きゆく一つ星である。 仰ぎ見て慰む和やかな光芒を放ちつづける。

‘詩とは 何であるか’ をバイロンは 示唆した。 Hearn の 批判した 厳しい攻撃のことば—— Byron 詩は 詩ではない——に対して バイロンは 反論せず ただ シニカルに笑えみをかえすだけだろう。

バイロンは みづからつぎつぎと吐きだした力強い詩の調の中に おのが詩観を示唆している。

‘詩とは passion であり power である’ と。

バイロンは 実に 投影の詩人、熱血詩人、力の詩人、叛逆の詩人 であった。そして心の豊かな、知性の詩人であった。 みづから矛盾を孕みつつ懷疑する、苦悩の詩人であり、雅量の詩人であった。 人の世を生きる証を明示し教へ訓してくれた詩人であった。

19世紀を力強く生きた バイロンの足跡は何人も これを消し去ることはできないであろう。

かつて、詩人は、Parry に向かって 彼の考えた新しい ‘機械工達の学ぶ学校’ を賞め讃えた。 ‘もし、その学校が 労働階級である彼等自身たちの手で運営されるならば その結果として 知性の解放が一つの黄金時代をむかえるであろう。そして、自分も援助金はよろこんで寄附させてもらうよ’。と語った。

‘^{みじ}貧しいことは惨めである。しかし、たとえ貧しくとも ^{ころ}情なき、意味のない、上流階級の、気晴しの浪費的道楽よりは ずっと ました’。とも語った。

そして 詩人は みづからが、その放蕩貴族の心境から、遂に解放されたことを、よろこび、^{あんど}安堵し、神に感謝していた。

Parry は、Byron の^{いだ}抱いた下層階級の人々への、新鮮な明確な、興味関心に驚嘆した。

Byron は、下層階級の人々のジョーク、逸話に格別興味を抱いた。そして Parry といっしょに 機械工達の働く工場を訪ねて 彼等の働きぶりを その目で確かめ 学びとった。

このような、詩人の非凡な観方は、奇しくも、神秘主義と宇宙時代とミックスされた、20世紀現代科学への好奇心に通ずるものであった。

詩人は Medwin と月旅行のことを論じたのみならず ‘The Island’ の中で A space-age 宇宙時代の到来を予言した。

Herschel の望遠鏡を覗いてみて、多くの遊星群に その星人の住む多くの世界があることを予知して Parry に語った。

‘神に任える聖職者は、みな 天文学に関する完全な知識をもつべきだ。天文学ほど人の心を、より寛く、より大きく、より豊かに啓発して呉れる科学はないよ。天文学は、人間の狭い心 を その狭量、偏見を解放して呉れるだろうからね。’

cosmopolitan として 終始した 詩人の豊かな雅量、‘大器 Byron’ の知性、人間性を彷彿させることば として、19世紀初頭に於けるその啓眼に、その素晴らしい頭脳に、只、敬服するのみである。

詩人は Dr. Kennedy と 神について、多くを語ったが、神を観ることに 天地創造の一元の神を 直視することができた。知性人として才幹として 19世紀初頭を代表する典型的人物であった。

しかしながら——

この豊かな知性をこえて、望遠鏡ですら 救い得ない矛盾を孕んだ 詩人であった。一言にして、それは 詩人の ‘分裂した性格’ であった。Byron は ‘矛盾の詩人’ である。

Shelley は ‘Adonais’ の中で 詩人を ‘The pilgrim of eternity’ ‘永遠の巡礼者’ とよんだ。その姿は 詩人が 虐^{しい}たげられた 民族の解放者であったこと、言語を陳腐な考えから解放したこと、そして、詩人群を象牙の塔から解放したこと の 功績、偉業に見出すことができるであろう。

詩人は かつて Annabella に向かって語った。‘冥想、沈思黙考のみにとどまる すべての存在は 間違っている。悪である。人は何かを行うべきである。’

ある意義深きことのため行動すべきである。’ と。

Goethe は 詩人の ‘文体’ を行動の一形態としてとらえて言った。‘たとえば、それは 鋼鉄板を切り裂く wire である’ と。

詩人がもし全面的に 自らを解放し得なかったとしても それは 彼がなお 時と空間の中を一巡礼者として彷徨し続けたからなのである。しかし 詩人程 ‘時’ と ‘永遠’ の間に介在する ‘相違’ を より鋭く 述べ得たものはいないであろう。

詩人の最も好きな時刻は 深夜と暁方の間の一刻であった。ペンを置いて窓外の寂かな海を眺めるとき どっと襲^{しづ}いくる ‘the sence of contrast’ の感覚こそ、詩人のいちばん親しんだ感覚であった。だから 詩人は 追放の時期を ‘海の見えない家’ に住んだことはなかった。

Tom Moore に宛てた手紙の最後の文句は、‘しかし、嗚呼、Poor human nature! おやすみ、いや、もう、朝だ、いま、4 時だ、the Grand Canal の上に 曙光^{しよ}が輝いている。そして the Rialto より陰影はひいてゆく。

Byron ほど より多くのものから その暗い陰影を取り除いた詩人はいないであろう。

悠久の星の光輝に対坐して 詩人は想う。

What nothing we are!

Mazzini は 詩人を評して言った。

‘Byron は 自分の堅琴を自らの手で壊^{こわ}して、ギリシャへ赴^{おもむ}くことで その巡礼の旅に 終止符をうった。しかし、その旅は the ‘nothing’ of ‘poor human nature’ を超えて それを ‘永遠の意義’ へと高揚した。

Byron の投げた波紋は、全ヨーロッパに、そして 世界の津々浦々にまで波及していった。

人々に対して ‘新しい考え方’ をもつべきである事を 訓えた。人々に向かって ‘それが、この世で 文句なしに 絶対的考え方 であるのか どうかを 自問自答すべきであることを訓えた。

‘Evil and Wicked’ として よび慣らされてきたものも、それ特有の 悪魔的 美’ をもつもののだとして、示唆したことがヨーロッパ全土の文学界に新風を吹き送った。Satanic spirit!

悪魔的精神！ その真の意味は——

‘清純なモラル’ とは異った ‘別の道徳律’ の存在を示唆したことである。

それは——

‘苦悩することの律’ ‘闘争することの律’ であり 例え、不義、冷酷の側にくみしても、しかも、‘strength’ 力の光輝を放っている！

Byron は、自ら叛逆して、しかも、所信を貫き、敢行し それを うたい続けた！

Byron 文学が 不滅の光を放つのは Byron の力が 文学を支配し 制し得たからである。

Byron が 自ら ‘絶望的なもの’ ‘邪悪なるもの’ を力強く讃えたが故にこそ、Byron 自身すら、見究めることができなかったものを、人々は 垣間見ることができたのである。

‘世間から はみ出した 落ちこぼれた 悪役こそ 人の世の掟——人間がそれから完全には脱出できない——の 指標 であることを Byron は 示

唆した。

Satanic School! ‘悪魔派’

それは 桂冠詩人 Southey が Byron に向かってたたきつけ、吐き棄てたことばであった。

しかし、今—— Byron は

Westminster Poets Corner に 雑詩人群と 同居して肅かに永眠る^{しづ}。それは死後一世紀半余を経て皮肉な、奇しき、栄光の、殿堂入りだった。しかし—— Lake Poets の誰もが胸にし得なかった最高位の榮譽勲章 ‘悪魔派’ が その胸に 燦然と輝いている。

スコットランドの生んだ 19世紀最大の鬼才、George Gordon 6th Lord Byron の偉徳を、人々は 忘れ得ない^{あたた}。いつの世も 仰ぎ見て 憧がれ、慰む 滋かい光芒を放っている。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge, The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie A. Marchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadio Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂